

「おい、山谷。殺し屋、知ってるか？」

昼食を済ませて、会社に戻ってくると、編集長が唐突に言った。

「は？」

「いや、だから、殺し屋」

山谷は、編集長のデスクの前に立った。部屋を見回す。出払っているのか、誰もいない。

「俺の知り合いには、そんな職業の人間、いませんが？」

編集長はペンを走らせている。山谷を見ようともしない。

「この前の殺人。旧市街との境であったやつな、あれにも殺し屋が関係してるらしくてな」

「それを、今度の記事に？」

「そうそう。それで、担当はお前」

編集長は顔を上げ、山谷に紙を手渡した。

「それ、そういうことに詳しい奴らの住所ね。とりあえず、当たってみて」

編集長は言い終わると、視線を机の書類に戻した。

「わかりました。では、早速」

「おう」

部屋を出るとき、編集長の声が後ろから届いた。

「ま、期待はしてないから。気楽にやって」

大波社の「別冊アイ」は、「ジャンルを問わず、あらゆる不思議を追求する」がコンセプトの雑誌である。

他誌が取り上げない物事を記事にしているからか、一定の発行部数を維持している。

雑誌の中で、とりわけ地味な特集が「わが町の闇」である。「身近な事件を取り上げる」というもので、担当は山谷しかいない。

「ああ、それなら、有名だよね」

その答えを聞いて、山谷は空へ向けていた視線を戻した。目の前の女は、ガードレールに腰かけている。

最初は居酒屋の店員の男、次にスナックで働くおかまを訪ねたが、空振りだった。

「ねえ、聞ってる？」

化粧は濃いけど、まだ若そうだ。

「ねえってば」

「あー、ああ。それで、殺し屋を見たこと、あるの？」

「や、あたしはないんだけど。でも、旧市の奥にある店に行けば、そういう人たちに会えるって」

旧市とは、町の西側にある区域の俗称である。旧市街とも呼ばれ、古い建物が多い。犯罪が多発している地域でもあり、近づこうとする者は少ない。

「えー、それは、どこからの情報かな？」

「あたしの友達がね、行ったんだ。そしたら、いたんだって」

「その友達、何か依頼とか、したのかな」

山谷の言葉に、女が笑った。

「んなわけないじゃん。何人かでね、ただちょっと、噂が本当かどうか、確かめてみようってさ。でも、すぐに追い出されちゃったとか、言ってた」

「ふーん、そうなのか。それじゃ、その友達、紹介してくれない？」

「え〜。駄目。迷惑かかるじゃん、そういうの」

「ああ、そう、そうね。じゃあ、その店の名前、わかる？」

その後、編集長から渡された紙に書かれている住所をすべて回った。

「その店に行けば、金さえ出せば、何でも引き受ける連中がいる」という噂が、いつの頃からか、流れるようになったらしい。

何でも引き受けるというのが事実なら、殺人を請け負っている可能性は十分にある。

日が暮れてから、山谷は旧市街に向かった。電灯が等間隔に並んでいるだけで、人の姿はない。

その店は、旧市街の中心から、北へ数分歩いたところにあった。

三階建ての雑居ビル、その一階の入口の前に看板が置かれている。看板の前まで行くと、山谷はビルを見上げた。

二階と三階は、明かりが消えている。看板に目を戻した。「喫茶 雷神」と書かれている。

扉を開くと、ベルが鳴った。

山谷は、店内を見回す。

テーブル席が四つ、その奥にカウンター席が八つ。

一番手前のテーブル席に、三人が座っている。あとは、カウンターの端に座っているのが、一人。

カウンターの中に立つ男が、山谷を見た。

「いらっしゃいませ」

男は、赤いネクタイをしている。山谷は、カウンターへ近づいた。

「ここに、便利屋がいると聞いたんだが」

山谷は尋ねながら、男を観察した。年齢がよくわからない。特徴のない顔つきをしている。

男は、何も言わずに、端のカウンター席に目を向けた。山谷も視線を移す。

座っている人間と目が合った。

黒いコートを着た、若い女だった。

髪は黒のショートで、化粧っ気のない顔をしている。

女は、じっと山谷を見ているだけで、何も言わない。

山谷は、女に歩み寄った。

「君が、そうなのか」

「ええ」

女の声は、小さかった。

「俺は」

「知ってる」

山谷の言葉を、女が遮った。

「は？」

「嗅ぎ回っていたから、あなた」

女は、それ以上、何も言わない。

山谷は、視線を外した。女が黒い手袋をしていることに気づいた。

「そ、そうか。話が早くて、助かる。で、君の名前は？」

「その方に、名前はありません。強いて言うなら、彼女、でしょうか」

カウンターのの中の男が、山谷に言う。

「彼女？名前が、彼女？」

山谷は、男の方を向いた。

「ええ、そのように呼ばれています」

「本名は、あるんだろ？」

「さて、どうでしょうか」

山谷は、女に向き直る。

「ふーん、まあ、いい。それで、聞きた」

その時、入口のベルが鳴った。

山谷が振り返ろうとした時、彼女が静かに立ち上がった。

一步踏み出すと、足払いをかけて、山谷を床に倒す。

「なっ」

「動かないで」

山谷の視界から、彼女が消えた。

何が起きているのか、山谷には、わからなかった。

発砲音が耳に届く。

何度も、何度も。

やまない銃声。

顔を上げる。テーブル席が見えた。

二人が倒れている。赤い液体が流れている。

目をそらす。

どことなく、臭い。

周囲を見る。

欠けたグラス。

飛び散った液体。

机や椅子の破片。

倒れている人。

気づけば、銃声がしない。

視線を、入口の方へ。

一人、倒れている。

首の向きが妙だ。曲がっているのか。

その顔の左目に、眼帯。

その近くに、彼女が立っていた。

山谷は倒れたまま、動けずにいた。

彼女が、山谷に近寄り、手を差し出す。

「ついてきて」

彼女の後を、山谷は必死で走った。

やがて、彼女が足を止めた。

建物に挟まれた路地裏だった。

山谷は深呼吸をする。足が熱い。

自分がどこにいるのか、判然としない。

前方から、人が歩いてきた。彼女の横を通り過ぎ、山谷の前で、立ち止まる。

「おじさん、大丈夫？」

若い女だった。黄色のヘルメットを被っている。

「どこか、怪我とか、してない？」

山谷は、ヘルメットを見た。黒字で、「安全第一」と書かれている。

「大丈夫？」

女が、手に持っている缶を山谷に差し出す。

山谷が躊躇していると、女の後ろに立つ彼女が言った。

「毒は入ってないから」

山谷は、缶を受け取る。

「君は、彼女の、あの、仲間か」

山谷の質問には答えず、女は彼女の方を向いた。

「予定通りだよ」

彼女が頷く。女は、振り返ることなく、そのまま路地裏から出ていった。

「予定？何のことだ」

彼女は山谷を見つめるだけで、何も言わない。

「こういうことは、よくあるのか」

「こういうこと？」

「その、さっきのやつだ。あれは、君を狙ったのか。それとも、あの店か」

「知らない」

「は？じゃあ、なぜ逃げた」

「面倒だから」

「面倒？」

「ええ」

「殺されそうになったんだぞ」

「よくあることだから」

「よく？」

「ええ」

「なぜ、こんなことをしてる？」

「仕事だから」

「仕事？仕事なら、ほかにも、あるじゃないか」

「あなたは？」

「俺？」

「どうして、今の仕事を？ほかにも、あるのに」

「どうしてって、それは」

山谷は、そこで言葉を切った。改めて聞かれると、返答に困る。

思わず、空を見上げる。

綺麗な満月が出ていることに気づいた。

「なあ、それ」

視線を戻すと、彼女がいない。

山谷は、道の前後を見た。

彼女の姿は、どこにもなかった。

山谷は、新市街に戻ることにした。路地裏を進んでいたが、どちらに向かえばいいか、わからない。

そこで、大通りを歩くことにした。大通りに沿っていけば、新市街への道に合流するからだ。

大通りにも、人の姿はなかった。

しばらく歩くと、橋が見えてきた。

町の中央には、細い川が流れている。そのため、旧市街と新市街を隔てるように、橋がかかっている。

山谷は、立ち止まった。傍の電柱に手をつく。それほど歩いたわけではないが、足が痛かった。

「おい」

声に振り返ると、男が数メートル先に立っていた。

右目に、眼帯。

銃を持っていた。

銃口が山谷に向けられている。

山谷は、動けなかった。声も出ない。

「あの女は」

言いかけて、男が横を向く。

いつの間にか、彼女が立っていた。

彼女が、右手で男の腕を叩いた。

銃が落ちる。

同時に、彼女が足払いをかける。

男が体勢を崩す。

彼女が、男の落とした銃を左手でつかむ。

男の胸に銃を押し当てる。

そのまま、彼女が男に覆い被さった。

静かな音がした。

もう一度、音。

彼女が立ち上がる。

男の顔に、銃を向けた。

再び、静かな音。

一瞬の出来事だった。

彼女が、倒れた男の近くに銃を捨てる。

山谷は、一步近づいた。

「それ、誰だ」

彼女が、山谷を見た。何も言わない。

「狙いは、君か」

「ええ」

「俺に銃を向けていた。そいつは、つまり俺を、殺すつもりだったのか」

「ええ」

山谷は、彼女を見つめた。冷静な返答を聞いて、気づく。

「俺を、おとりにしたな？」

彼女は答えない。

「死にかけたぞ」

「でも、生きてる」

「何だと？」

「まだ、死んでない」

「何だ、そりゃ」

山谷は笑った。

ふと、橋の向こうを見る。

夜明け前の、まだ暗い空だった。

その後、「別冊アイ」が発売された。

「わが町の闇」コーナーでは、「旧市街で頻発する銃撃事件」という特集記事が組まれている。

しかし、彼女に言及することは、一度もなかった。

「貸店舗」という表札を前に、山谷は立ち止まった。

朝の会議が終わると、すぐに旧市街へと足に向けた。「喫茶 雷神」が現在どうなっているか、確かめるためだ。

店の修復は終わっているらしい。

窓から店内を覗き込む。机や椅子が一つもなかった。

山谷は、踵を返した。

橋の近くまで来たところで、視線を感じた。

山谷が振り向くと、ビルとビルの狭間、影になった場所に彼女が立っていた。

山谷は、周囲を見た。人通りは少ない。

彼女に近づいた。声が届く距離で、立ち止まる。

「あの店、潰れたのか」

「いいえ」

「空き家だったぞ」

「別の場所に、移ったから」

「別の場所？」

彼女は、山谷をじっと見る。山谷は苦笑した。

「わかった。聞かないでおくよ」

「まだ調べるつもり？」

「さあ、どうかな」

「決まってない？」

「決めてない。また事件があって、それを記事にすることになれば、あるいは、な。だから、決めてない」

「そう」

彼女が、山谷から視線を外した。空を見ている。

山谷も見上げた。

雲が緩やかに流れている。青い空だ。

視線を戻した。

彼女がいない。

「だろうと思ったよ」

山谷は呟くと、新市街に続く橋へと一步を踏み出した。